

D-2 沼津中心部

沼津駅・妙覚寺・千本浜公園

1 沼津駅

東海道本線沼津駅は、湯ヶ島から沼津に行く時はもちろん、豊橋に行く時にも途中下車した駅です。駅前には、おぬい婆さんが定宿としていた旅館があり、三島からの“チンチン電車”の停留所もありました。現在の沼津駅はその後建て替えられたものですが、駅前には当時走っていた蒸気機関車の車輪などが展示され、その横に井上靖文学碑があります。

駅前の井上靖文学碑

2 妙覚寺(妙高寺)

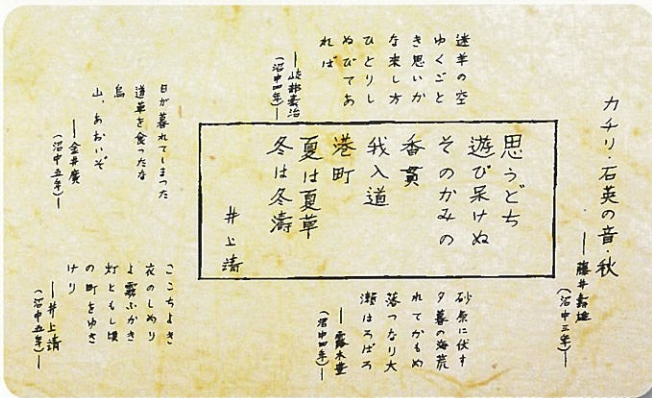


鐘楼 本堂



妙覚寺の井上文学碑

妙高寺は、洪作が下宿することになり、活発な寺の娘の郁子にたじろぐ様子が描かれる寺です。この寺は、実際に井上靖が下宿していた妙覚寺がモデルとなっています。妙覚寺は沼津駅からさんさん通りを南下し、沼津港に向う途中にあります。当時の建物のほとんどは空襲で焼失しましたが、鐘楼だけは当時のものです。庭には、井上靖と四人の友人たちの詩や短歌が刻まれた文学碑があります。



カチリ石英の音秋
「夏草冬澗」より
「すまないけど、あなたたち、本堂の方へ廻つて頂戴よ」郁子は挨拶なしに言った。……(中略)……本堂の方へ廻つて行くと、郁子が縁に出て待っていた。「お願いがあるの」郁子はここにこして言った。「なんです、藤尾が言うのと、「あなた一番力がありそうね。畳、上げられる」郁子は「畳を上げておもうぞ」「畳を上げておもうぞ」に干したの、藤尾は顔をくしゃくしゃにして、「二三歩後ずさりしてみせな。」



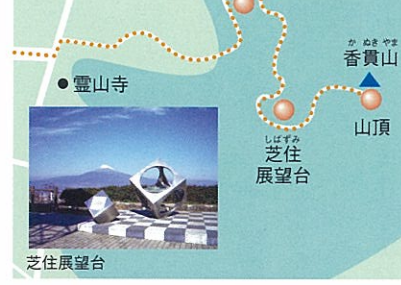
千本浜の井上文学碑(上) 壁に刻まれた詩(下)

千本の海のかげから
扶まっていた
少年の毎日
私を一つずつ
食べて育った
井上靖

千本浜海岸と松林
砂浜と松林は富士市まで約15kmに渡って続き、晴れた日には、富士山も望めます。

D-2 沼津中心部

香貫山



香貫山台から見る沼津中心部 香貫山台の五重塔と富士山

黒瀬橋の南にある雲山寺横の小道から、沼中生たちの遊び場だった香貫山に登ります。中腹の香貫山からは、北に愛鷹山と富士山、西に「夏草冬澗」の主舞台である沼津中心部を見渡すことができます。五重塔と若山牧水の文学碑がある香貫山台の駐車場に車を置き、五分ほど歩くと芝居展望台に着きます。展望台からは狩野川の河口や千本浜、駿河湾や伊豆半島など、三六〇度の雄大な景色を楽しむことができます。

D-2 沼津中心部

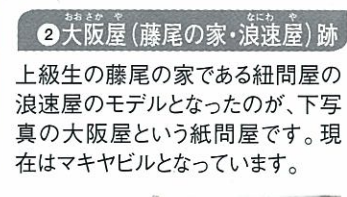
御成橋周辺

御成橋は、洪作や仲間たちが沼津駅や繁華街に出る時、千本浜へ遊びに行く時などに必ず渡った橋です。この橋の右岸には、上級生の家、親戚の家、ラーメンを食ながら遊びの相談をした中華料理店などがありました。現在、これらの家や店は、残っていませんが、跡地を訪ねることで、洪作たちが遊び歩いた世界を感じることができます。また、洪作たちが西海岸への旅に出航した船着場は、御成橋のたもとにありました。現在、船着場はありませんが、川岸に下りる石段や、川岸に建てられた土蔵の石垣などが当時のまま残っており、かつての船着場のにぎわいが想像できます。



1 御成橋

沼津を象徴する大きな橋で、当時はレンガ橋脚の三連鉄橋でした。現在の橋は一連で、昭和12年に架け替えられたものです。



2 大阪屋(藤尾の家・浪速屋)跡

上級生の藤尾の家である紐屋の浪速屋のモデルとなったのが、下写真の大阪屋という紙間屋です。現在はマキヤビルとなっています。

D-2 沼津中心部

黒瀬橋から沼中へ



1 黒瀬橋と狩野川堤

黒瀬橋の南東には香貫山が見えます。当時は木の橋で、香貫側から見ると、橋の向うに東海道の松並木が見えました。



2 沼津中学跡

沼中の正門は、現在の市民文化センターの裏門にあたり、正門までの道は松並木がきれいでした。市民文化センター正門付近の「思うどち…」の文学碑(上写真)のある所には、寄宿舎が建っていました。

チンチン電車の停留所があった山王前でバスを降り、黒瀬橋を渡って、狩野川の左岸を歩きます。このあたりは、洪作の通学路の最後の部分であると同時に、写生の授業で上級生たちと出会う場所でもあります。また、沼中跡地の沼津市民文化センターには、建物内部の壁面に「ふるさと」の詩、正門付近に「思ふどち…」の文学碑があります。



2 沼津中学跡

沼中の正門は、現在の市民文化センターの裏門にあたり、正門までの道は松並木がきれいでした。

市民文化センター正門付近の「思うどち…」の文学碑(上写真)のある所には、寄宿舎が建っていました。



3 かもぎの家跡

母方の親戚の家。モデルは井上家の親戚の近喜魚網店で、現在の菓子屋雅心苑の南隣にありました。



4 船着場跡

狩野川の岸へ下りる石段や土蔵の石垣は当時のままです。

「夏草冬澗」より
御成橋を渡る時、四人の少年たちは橋の上で足を停めて、暗い川の面を眺めた。どこかに月も出ているのか、川の面のところどころがにぶく光っている。その光っているところだけに川波の立っているのが見えた。橋の上に立っているのも少しも寒くはなかった……(中略)……「山々の迫りあひを流れ来るか、いな、その歌、俺旅に出たくなつた」藤尾が言うと、「こんど五月に休みが続くだろう。どこかに旅行するか」金枝が言った。旅という言葉が大きい魅力で洪作の心を捉えた。「旅、いいなあ、俺も行く」